

松江市岡田山1号墳から出土した円頭大刀には、「額田部臣」の銘の入っていることが知られ、額田部氏は、『出雲国風土記』にも出ています。蘇我堅塩媛を母にもつ推古天皇は額田部皇女と呼ばれていたことから、出雲東部には蘇我氏の影響が及んでいたのかもしれませんが。額田王は『日本書紀』の記事に「額田姫王」と記載され、鏡王の娘とあり、その系譜は不明ですが皇族だと考えられます。深澤先生は額田王に思いを抱いているようですが、どんな女性だったのか彼女の和歌を追ってみましょう。

0008: 熟田津に 船乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな

この歌は百済からの援軍要請に応え、朝鮮半島へ出兵する途中で、四国から九州へ向かって船出する際に詠まれました。意味は“熟田津で船に乗ろうと月の出を待っていますと、月が出たばかりでなく、潮も満ちてきて、船出に具合がよくなりました。さあ、今こそ漕ぎ出しましょう”。暗い海路に月の光が射し、潮が満ちてくる情景を前に、困難な航路へと旅立ってゆく人々を鼓舞し勇気づける、作者の凜々しい姿を想い浮かべずにはいられない初期万葉のシンボリックな傑作です。

0018: 三輪山を しかも隠すか 雲だにも 心あらかなも 隠さふべしや

古代人の山河自然に対する絶大な親愛の感情に溢れる歌と評価されています。額田王は仕えていた斉明天皇の推挙により、大海人皇子の最初の妻になり十市皇女を出産しています。そして667年の近江大津宮遷都のころ、天智天皇に召されて後宮に列したようです。669年には大友皇子の正妃となった十市皇女が葛野王を出産しているので二人の結婚もこの頃です。自らの境遇の変化、また娘の境遇の変化はこの歌が詠まれた後のことでしょうか。それとも既に変化を経ているのでしょうか。古京の三輪山に見ていたものは自然への親愛の情だけだったのでしょうか。

0020: あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る

安田鞆彦作『飛鳥の春の額田王』



額田王の歌の中で、最も広く知られている歌です。蒲生野に多くの廷臣や女官達が薬獵をした時の歌とされます。意味は“茜色の日差しが差す蒲生野、かつて妻であった女性に、大勢が散策している野の中で大胆な求愛をする男、そしてそれをたしなめる女性”。後世の恋のヒロインを印象付ける事になった歌と言えるでしょう。しかし、実際にはこれは座興の歌として詠まれたという説が、有力になっています。「万葉集」の中では「相聞」ではなく「雑歌」に分類され、題詞には「額田王の作る歌」とあって、「贈る歌」とはなっていないこと等から裏付けられています。また当時の額田王は四十歳は越えていたと思われ、また大海人皇子も同年代、そして二人にはもうすぐ孫も生まれようかという時であり、情熱的な恋の歌として詠まれたとは考えづらいようです。

0488: 君待つと我が恋ひ居れば我が宿の簾動かし秋の風吹く

深澤先生はこちらの歌が一番好きだそうです。意味は“あの方が早くおいでにならないかと、恋しくお待ちしていると、我が家の簾がそよそよと動き・あの方かと思ったけれど、お姿はなく、秋風が吹くばかり”。題詞には、「近江天皇(天智天皇)を思って詠んだ歌」とあります。深澤先生は当時の恋愛観は気になされないそうですが、複雑な心境です。万葉集ではこの歌に次いで鏡王女の歌を載せています。この鏡王女は額田王の姉かもしれない歌人で、藤原鎌足の室になる前は天智天皇の妃だったとも言われています。姉妹説は別としても、男性一人をめぐって二人の女性が歌を詠みあっているわけです。

0113: み吉野の 玉松が枝は はしきかも 君が御言を 持ちて通はく

持統天皇が聖地吉野に行幸した際に同行した弓削皇子が苔のむした松の枝を贈って献上した歌に応えた歌です。意味は“吉野の美しい松の枝はなんて慕わしく思えるのでしょうか。あなたのお言葉を持って飛鳥の都まで通って来るとは”。弓削皇子は当時二十代、額田王はすでに六十代の老齢です。常緑・長寿の樹である松は、生命を守る精霊の憑代と考えられており、弓削皇子は額田王の長寿を願って松の枝を贈ったのです。政略や戦乱の時代を強く、たおやかに生き抜いた女性のようなようです。

※ 古代史(弥生時代～飛鳥時代)に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論 大募集 (体裁は自由ですが、文書でお願いします)